

22PO-pm391

唾液中サブスタンス P 量を指標とした嚥下機能評価法とその応用

○常風 興平¹, 平田 歩¹, 藤田 博子¹, 飯塚 美知郎¹, 八木 祐助¹, 森田 靖代¹, 弘瀬 かほり², 兵頭 政光², 宮村 充彦¹ (高知大病院薬,²高知大医耳鼻咽喉科学講座)

【目的】加齢や基礎疾患に伴い、嚥下機能が低下した嚥下障害予備群が多数存在する。嚥下反射は、迷走神経知覚枝から咽頭、喉頭、気管支粘膜に放出されるサブスタンス P (SP)より制御されている。今回、臨床試験を実施し、唾液中 SP 量を指標とした嚥下機能評価法の有用性を検討した。さらに本法を応用し、TRPV1 agonist である gingerol および shogaol を含有するショウガ (*Zingiber officinale*) 配合口腔内崩壊(OD)錠単回服用前後における唾液中 SP 量の測定を行い、TRPV1 agonist による嚥下機能改善効果の評価を行った。

【方法】被験者は、20 歳以上の健常成人を対象とした。被験者 16 名に、嚥下内視鏡検査を実施し、嚥下機能を嚥下内視鏡スコアによりスコア化し、唾液中 SP 量と嚥下内視鏡スコアの相関性を検討した。さらに嚥下内視鏡検査を実施した被験者 16 名を含む被験者 70 名に唾液中 SP 量の測定を行い、年齢との相関性を検討した。また、これまでに我々が報告してきたプロトコールに従い(Abe *et al.*, *Food Science and Technology Research*, 2015)、2mg ショウガ配合 OD 錠を作製し、ショウガ配合 OD 錠服用 15 分後の唾液中 SP 量を測定し、服用前後の唾液中 SP 量を年齢により層別化し、比較した。

【結果・考察】唾液中 SP 量と嚥下内視鏡スコアは負の相関性が認められた($n=16$, $r=-0.689$, $p<0.01$)。さらに年齢と唾液中 SP 量は負の相関性が認められた($n=70$, $r=-0.712$, $p<0.01$)。またショウガ配合 OD 錠服用により、唾液中 SP 量が全ての年齢層で有意に上昇し、嚥下機能低下傾向のある高齢層において嚥下機能の改善が示唆された。以上より、加齢に伴う唾液中 SP 量の低下と嚥下機能の低下に相関性があり、唾液中 SP が侵襲性のない嚥下機能のバイオマーカーとして有用であることが示唆された。